

個別研究編

個別研究編について

序文でも触れたが、個別研究編では調査結果をうけて、分析や対策について踏み込んだ研究成果について公表する。以下、編者より各論考に対する若干の解説をほどこしつつ、本書における個別研究編の位置づけを行おう。

佐野論文は、本館のマイクロ収蔵庫の環境と空気清浄機「フレッシュ・オドコップ」による酢酸除去実験について考察し、保存環境の整備と環境全体としての酢酸除去の有効性を論じたものである。酢酸については、フィルムごと、キャビネットの引き出しごとといった、小環境単位での吸着・除去を考えがちであるが、収蔵庫という大環境に着目した点が特筆される。本館では地下書庫においてカビ被害が出たため、平成 18 年度より東京文化財研究所に環境改善のための協力と助言をお願いしてきた。これらの経緯から、本館における中長期的な温湿度調査や、試薬による酢酸濃度調査のデータのとりまとめと、環境化学者の立場からの考察を佐野氏に依頼した。

潮田論文は、本館のマイクロフィルムにおいてみられた PET ベースの異常現象について、各種の実験データを取りまとめてその原因を考察するものである。この問題に対して管理上の問題として片付けられる場合が多いなか、潮田氏は原因究明にはじめて正面から取り組んでいただいた。そこで潮田氏が本館に提出された実験レポートを改稿して掲載させていただくことにした。潮田論文の主たる論点は、PET フィルムの異常現象が水を介在するフェロタイピングであることを実証した点、フェロタイピングのうち金色の皮膜の付くような異常現象は現像時の残光吸収材によるのではないかと仮説をたてた点にある。特に後者は DD フィルムの特性に着目したものであり、多くの示唆を与えてくれる。

吉田・阪口論文は、劣化した 8mm フィルム修復技術のマイクロフィルムへの応用の可否を問うものである。従来であれば、ビネガーシンドロームにより湾曲したフィルムの複製作成は不可能で、廃棄する以外の道はなかった。このたび実験材料としたマイクロフィルムは、本館所蔵の第一国立銀行の営業報告書の、しかも明治の早い時期のもので、管見の限り国内に所蔵機関は無い。本館でも現資料は所蔵しておらず、フィルムの複製も不可能で今後の利用は半ばあきらめていた。これが十分に複製作成可能となるまでに平面化され結晶化も判読可能なレベルに軽減された。情報を救い得る可能性を押し広げたことは間違いないが、実験サンプルが少いため、本格的な実用化の可否については、改めて検証する必要があるだろう。

最後の論考は東京大学経済学部資料室スタッフによるものである。潮田論文のもととなったレポートを得たあと、別の角度からの検証の必要性を考え、複数の専門家の協力の下で行った実験データをまとめ、考察を加えたものである。論文中で本書内の潮田論文を引用・参照しているのは、両者にこういった時間的、内容的な前後関係があるからである。PET フィルムから剥離した皮膜、すなわち接着材となった物質について、潮田論文では現像時の残留物質と想定しているのに対し、この論考ではバック面もしくは乳剤層じたいに原因があると考えている。

両者の仮説は齟齬するよう見受けられるかもしれないが、異なる視点からの可能性を提示したまでであり二律背反するものではない。

以上のように個別研究編には本館に関する調査や本館から提供された材料に基づく多彩な論考を集約することができた。執筆者各位に改めて御礼申し上げます。

東京大学経済学部資料室